

木全ミツの グローバル随想

第5回

創業社長を お引き受けする

～「The Body Shop, Japan」に



イラスト・題字：長峯亜里

New York での3年間(1986～89)の国連公使としての単身赴任の任務を終え帰国。労働大臣官房審議官として仕事をしていたある日、「ぜひお目にかかりたい」という1本の電話をいただいた。ジャスコ(現イオン)の岡田卓也会長(当時)からであった。小売業の方が労働官僚の私に何のご用件かしら……しかし、何かご用事がおありになるのだろうかからお目にかかることにした。

ヘッドハント 官僚から小売業に

「岡田です。実は、The Body Shop がですね、名前が悪いので変えよと言ったのですが、変えないのですよ……」。「????」この方は何を話されているのかしら……と少し疑問に思いながらも、Be nice! (礼儀正しく)と心に呼びかけながら最後までお話を耳を傾けることにした。30分ぐらいのお話が終わったところで、「あの一、私は現役 of 官僚です。お話をうかがっているととにかく官僚をやめよ……とおっしゃっているように聞こえるのですが?」「そうです。ワッハッハッ!」。想像もしないお話に、それ以上会話を続けることができなかつた。別れ際、岡田会長は「英国本社の社長についての掲載記事の切り抜きを持ってきましたので、差し上げておきます」。ああおかしい! 私を引き抜きにいらしたのだわ。「官僚から小売業に」と発想する人は皆無であり、また「ヘッドハントという言葉もない」時代(1989年)

のことである。

渡された切り抜きの東^{たば}は、しばらくは審議官室の片隅に置かれていたが、ある昼休みにちょっと時間があつたので、ばらばらと数枚の記事に目を通してみると、「面白い。こんな企業が、こんな女性が世界には存在するのだろうか」と関心が強くなり、岡田会長にご連絡した。「会長もお忙しいでしょうし、私も。それでは、早朝30分お時間をいただけますか……」という調子で、4～5回の早朝デートを重ねさせていただいた。あとでうかがったことだが「あの近寄りがない、こわい会長を呼び出すなんて、この世にあなた以外にはありませんよ」と。

周囲の反対と無理解に決意高まる

The Body Shop とは、1976年にイギリスの女性 Anita Roddick 氏が創業した化粧品・トイレットリー業である。

彼女は、国連の専門機関である ILO (国際労働機関) で女性問題を担当、世界各地に存在する700～800の種族を訪ねながら世界が直面する「環境保護」「人権擁護」「動物愛護」の諸問題を身をもって経験し、「まず企業がこれらの問題に対して関心を持ち、自分たちの問題であると捉え、日々のビジネス活動の中でその責任を具体的な行動を通して果たしていかねばならないのではないか」、儲けだけに走ってきた「20世紀型経営」に別れ